



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

補習授業校における派遣教員の役割(学校経営)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-11-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 峯本, 伸一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174452

補習授業校における派遣教員の役割

前ボストン補習授業校 教頭

奈良市教育委員会 指導主事 峯 本 伸 一

キーワード：基幹教員，学校運営管理，よりよい学校

はじめに

在外教育施設のうち、補習授業校については、派遣される者の割合が少ないこと、日本人学校に教諭として派遣される場合とは多くの点で異なることなどから、その実態をあまり知られていない面があるように思われる。そこで、本稿では、ボストンにおける事例をもとに、補習授業校における派遣教員の役割や業務について、既派遣者の観点から示していきたい。

1. 在勤地の概要

ボストンは370年の歴史を有するマサチューセッツ州の州都である。現在は、狭義の行政区画としての「ボストン市」だけでなく、周辺のケンブリッジ、ウォルサム、メドフォード、ブルックラインなど大小の行政区画を包含した「大ボストン市」を指すことが多い。ニューイングランド地方最大の都市であり、この地方の商工業・文化の中心地となっている。周辺地域を含めた人口は約450万人である。日本との関わりにおいては、マサチューセッツ州と北海道が姉妹州関係を、ボストン市と京都市が姉妹都市関係をそれぞれ結んでいる。

マサチューセッツ州の主要産業は、ライフサイエンス産業（医療機器、バイオテクノロジー、医薬品）、知識産業（コンピューター、エンジニアリング、法律、経営コンサルティング、研究機関）、ハイテク産業（コンピューター、通信関連製造業、ソフトウェア）、金融業（資産管理、ベンチャーキャピタル、保険、商業銀行）等であり、日本人駐在員が所属する企業等多岐にわたっている。

2. ボストン補習授業校（ボストン日本語学校）の概要

本校は、昭和50年（1975年）に、ボストンに長期滞在する日本人の「日本語が第二言語となっている自分たちの子どもに日本語教育を」という願いのもとに設立された。現在では「期待を持って登校する子ども達に手応えのある教育活動を！」という学校教育目標のもと、3歳児から高校2年までの園児児童生徒を対象とし、現地高校（MEDFORD HIGH SCHOOL）校舎を借用して毎週土曜日午前中に教育活動を行っている。

平成21（2009）年度の学級数は41であり、園児児童生徒数は約700名である。園児児童生徒のうち、ボストン市内に居住する者は少なく、いわゆるグレーターボストンと称する周辺の地域に居住している者が多い。中には隣接するRI州やNH州などから車で3時間近くかけて通学する者もいる。

教育に対する関心は大変高い。また、子どもが置かれている状況によって、本校に対する次のような教育要求の違いがある。

- （1）日本の教育へのスムーズな接続の場合（4～5年程度の滞在で帰国予定が明確な場合）
- （2）日本語や日本文化に親しむ場（長期滞在等で子どもが日本語を第二言語とする場合）
- （3）日本語に接し楽しめる場（1～2年程度の滞在で早く英語を身につけさせたい場合）

こうした実態を踏まえての、学部を設置状況及び主な教育活動の内容は以下のとおりである。

- ・ 幼稚部（言葉、表現、人間関係）

- ・ 小学部（国語，算数，日本文化に触れることを念頭に置いた特別活動）
- ・ 中学部（国語，数学，日本文化に触れることを念頭に置いた特別活動）
- ・ 高校部（国語，日本史，数学または古典，日本文化に触れることを念頭に置いた特別活動）
- ・ 日本語部（日本語及び日本の文化等：日本語を第二言語とする児童生徒対象）

3. 派遣教員としての業務概要

補習授業校に派遣される者は基幹教員とよばれる。基幹教員は，原則として教科等の指導を行わず，学校運営管理に関する業務を行う。本校における派遣教員（教頭）の業務概要は以下のとおりである。

(1) 人的管理に関する事柄

- ① 現地採用教員の支援
 - ・ 教育活動全般の企画立案・反省・次年度方向性提示
 - ・ 質問や相談などへの対応
 - ・ 授業研修（研究授業）での指導助言
 - ・ 初任者への研修
- ② 人事関連事項の遂行補佐
 - ・ 教員採用希望者への対応補佐（質問への回答など）
 - ・ 教員採用面接実施補佐
 - ・ 代講教員確保
- ③ 巡回指導
 - ・ 現地採用教員研修講師
 - ・ 派遣教員のいない補習授業校への巡回指導

(2) 物的管理に関する事柄

- ① 教材等購入計画の立案
 - ・ 教員からの購入希望集約・発注リスト作成
- ② 購入した教材等の管理
 - ・ 備品台帳管理（購入品の記入や備品へのラベル貼付など）
 - ・ 可能な範囲での営繕

(3) 金銭管理に関する事柄

- ① 教材購入や学校要覧作成など，必要予算の運営委員会（財務委員長）への要求や交渉

(4) 情報管理に関する事柄

- ① 教育活動推進に必要な連絡調整（実施日・活動場所・使用物等）
- ② 毎週の学校だより及びメールマガジン発行
- ③ 教育活動支援につながる情報提供
 - ・ 現地採用教員のニーズに応じた情報提供（方法・アイテム・映像等）
 - ・ 情報の電子ファイル化や自動処理プログラムの作成（通知票作成支援等）
- ④ 事務職員の業務遂行支援
 - ・ 質問や相談などへの対応
 - ・ 事務処理用コンピュータプログラムの作成（出席簿作成・名簿作成・会計処理等）

本校には，授業日が土曜日のみという特性から，日本の学校にあるような校務分掌は存在しない。したがって，「学校全体として取り組むあらゆる教育活動の企画立案から反省の集約・次回の方向性提示までを具体的かつ的確に

行うこと」「一つ一つの教育活動推進に必要な連絡調整をスムーズに行うこと」は、教育活動を推進させる上で、基幹教員とりわけ教頭の大変重要な役割となる。

4. 実際の取り組み

補習授業校における基幹教員としての業務は広範囲にわたるため、そのすべてを記述することはできない。また、学校運営管理に関する事柄は、指導実践記録等とは異なり、実情をとらえにくい側面があるように思われる。そこで、実際の取り組みをイメージしやすくする観点から、筆者が在任中に執筆した学校だよりの一部を抜粋して以下に示す。

※ 業務全般

…本校は今、大きな変革の中にあります。学校安全についての認識の変化と、それをふまえた諸対策の向上、PTAハンドブックの大きな改訂にみられるような、保護者の皆様と学校との協力・連携体制の一層の強化、学校緊急連絡網や皆勤賞の見直しにみられるような、現状に応じた制度の改革など、現状とよりよい将来を見越した様々な動きが加速しています。(中略)

様々な角度から検討を重ねた結果スタートさせた事柄であっても、「変わる」ことで生じてくる問題点というのはあるものです。でも、それらを「やめておけばよかった」「失敗だった」ととらえてしまえば、今以上の進歩はありません。時間がかかっても、困難であっても、それらと向き合いながら、どうすればよいかを模索していくことが、変革の中にいる者のあり方だと考えます。

少しでも学校をよくするために、一人一人が最善を尽くす、そして、一人一人がよい学校だと思えるようにする、私は、そんな学校風土をつくっていきたいと願っています。(以下略)

(ボストン日本語学校 学校だより 平成20年4月26日発行 第966号)

本校では昨年度「入退学及び進級・修了に関する諸規程」の大きな改正を行いました。また、学校安全確保に直結する、避難経路の見直しも行いました。私は主に実務面の事柄を進める立場にありましたが、両方とも、学校としての方向性を明確に示したできごとであったと思っています。

教員・事務職員との日々のやり取りや会議などでは、学校で行われる様々なことが話題や議題に上ります。約一ヶ月後の運動会、今日と来週の授業参観、教員の研修、体育的行事や文化的行事…。みんなの力を借りながら、これら一つ一つに対して「何を」「いつまでに」「どのように」するのか、方向性や方法を明らかにし、教育活動としての目的に到達できるようにしていくのです。物事を進める途中で間違いがあったり、不具合が生じてきたりすることもあります。そのようなときは、根気強く替わりの道を探すのです。

(中略)地に足のついた、また、将来を見通した学校運営の推進には「どのような情報を」「だれに」「どのタイミングで」伝えるのかを考え、それらが迅速に、風通しよくできるようにしておくことが不可欠だと考えます。そして、そのような状態の確立と維持に努めています。(中略)

できることから、よりよい学校にする観点から、教頭としての立場での学校運営への参画と寄与のあり方というものを常に考え、日々の仕事をしています。(以下略)

(ボストン日本語学校 学校だより 平成21年4月25日発行 第1005号)

※ 巡回指導

去る11月1日(土)に、コネティカット州にあるハートフォード日本語学校へ出張に出かけてきました。

(中略)基幹教員の役割の一つに、私たちのような者のいない近隣の在外教育施設の先生方に対し、教科指導方法等に関して、それらの改善のためのお手伝いをするというものがあります。

(中略)そこで、楽しく意欲的に学ぶための課題の示し方や、子どもたちの発想の引き出し方などについて、先生方や保護者の皆様と共に考え合いました。以下は、当日私が皆様にお話ししたことの一部です。

『…同じものを見せ、同じ内容のことを話し、同じテーマに沿って活動するのも、見せ方や話し方、活動のさせ方などで、子どもたちへの動機づけはだいぶ異なってくるように思います。また、誰でもそうですが、楽しいことには、時間を忘れてついつい没頭してしまうものです。』

学校に限らず、家庭学習でも同じことが言えるのではないのでしょうか。発達段階に見合うような小さなステップを用意すること、楽しみながらそれらをクリアしていくことが、子どもたちの学習を長続きさせることにつながります。何も特別なことをする必要はありません。ちょっとしたことで、大好きなお父さんやお母さんに「ここがよかったね」「ここが上手にできたね」と認められれば、子どもは達成感を抱きます。少しの時間でも、大好きなお父さんやお母さんといっしょに、日本語を読んだり聞いたり話したりするだけで、それは子どもたちにとって楽しい学習になるはずです。

アメリカというこの地で、英語環境に慣れ親しんでいる子どもたちの日本語能力を維持していくことは、本当に大変なことであると拝察いたします。(中略)もちろん学校でもできる限りの支援を行っていますが、時間等の制約を取り除くことはできません。だからなおのこと、ご家庭での支えが大切なのです。新たなことを習得する場(学校)と、共感的な雰囲気の中で、ゆったりと日本語を育む場(家庭)の両方が、子どもたちに必要なのだと思います。…』

補習授業校に共通する課題と、それぞれの学校が抱える課題との両方を感じ取ることもできました。とりわけ後者に関しては、現場経験の少ない、あるいは全くない先生方が、工夫したり悩んだりしつつ、真摯に実践を重ねておられる様子がひしひしと伝わってきました。そのことから、先生方が授業方法や学級経営のノウハウを学び合い、共有し合う場の重要性を再認識しました。(以下略)

(ボストン日本語学校 学校だより 平成20年11月22日発行 第987号)

※ 現地採用教員の支援

…(現地採用教員の)指導力の向上に寄与することも、私の仕事の一つです。

(中略)土曜日の放課後、平日の事務所勤務の折などに、いろいろな相談や質問が舞い込みます。昨年度ここにも書きましたが、本校だけでなく、派遣教員のいない近隣補習授業校からの出張要請もあります。

先生方と話をするとき、私はいつも、その学習活動のねらい—なにをやろうとしているのか—を明確にするよう伝えているつもりです。(中略)「なんのために」つまり「なにを学ぶ・考える(教える・伝える)」のかを、指導者がはっきりさせてこそ「どのように」が生きてくるのだということを(中略)実感したのでした。(中略)「どう教えるかよりも、子どもがその時間にどれだけ頭を働かせ、どれだけ考えるかが大切です」本校を去った先生が残していかれた言葉です。そのための指導者のあり方という点からみれば、上に書いた実感と同じことを、端的に表現しているように私には思えます。

(ボストン日本語学校 学校だより 平成21年11月21日発行 第1026号)

おわりに

ボストン補習授業校において、学校運営管理とりわけその実務的な部分を担えたことは、困難な部分も少なくなかったが、大変貴重な経験であった。自らがよりよい学校づくりに主体的に寄与するという強い姿勢が、常に必要であったと感じている。

補習授業校への派遣教員に対する現地の要望は極めて大きいものがあるし、その役割や責任も重い。今後の在外教育施設派遣事業継続の中で、補習授業校での派遣教員の役割に対する認識や、学校づくりに対する思いといったものが、よりよく継承・発展されていくことを願っている。